魅せられたのか

村田　寛

今度の OSTEC ジャーナルには、前川さんから注文がついた。自分史的なものも構わないが、「何故、私は英語に魅せられたか」というテーマで書いて欲しいということで、高名な同時通訳者の例を挙げられた。

これは困った。慌てて自分の過去を振り返ってみても、あまり「魅せられた」という思いがないのだ。どうしよう。しかし、考えてみれば、65 歳で会社を退職してから octogenarian になった今日まで、主にやってきたのは遊びを除けば翻訳学校への入学、後に其処の講師、専門学校での工業英語の講師、商社新入社員のビジネス英語の研修、外国語大学でのビジネス英語講師などなど、ほとんど全て英語にかかわることばかりだ。これは英語が嫌い、もしくは関心が無いでは勤まらない筈だ。では何所で英語にはまってしまったのだろうか。もう一度振り返ってみることにした。

小学校を卒業して中学生になると、目立って新しい学課は英語だ。算数が代数、幾何に、理科が物理、化学にと夫々つながりがあるが、英語は全く新しく始まった学課であった。どんな授業が始まるのか、少しドキドキする思いであった。その上、英語担任の先生は中学の教師というよりは英文学者の雰囲気であった。お宅の玄関にも本棚があって洋書がぎっしり並んでいた。しかし、これで英語に夢中になるということはなかった。以後特にどうということはなく、高校の英語はテキストの講読だけで興味を引かれることもなく終わってしまった。大学の授業では無機化学のテキストは英語であった。雑誌会というのがあって英語の文献を輪読した。このあたりは理工系の学生の最も一般的な経路といえるだろう。そして戦後間もないに時代に卒業、やっとの思いで某塗料会社に就職できた。ここでは有志が時間外に集って外国文献の輪読会などをやっていた。

さて、時は過ぎ去り 1970 年代の後半ごろ、主としてヨーロッパ各国の塗料会社で構成する船底塗料のアソシエーションに参加するとになった。ところがそれを担当することになっていた部長が病気になり、急にお鉢が私に回ってきた。そこで共同研究のリポート、手紙、契約書の英文下書きなどを書く破目になった。まだ海外との交信にはテレックスが使われていた時代の話である。

この事が始まる以前に、東京の支店で海外とのやり取りを担当していた別の部長は既に退社していたが、手紙類はすべて元外交官で貿易会社の顧問をしていた N 氏に依頼していたようで、その N 氏を私に紹介しておいてくれた。この N 氏は非常に親切で温厚な紳士で、私も先方の社長に出すような手紙は見てもらっていた。新しく書いた方が早いであろうに、

私の下書きを丁寧に添削してくれた。今もそれは分厚いファイル２冊にして残してある。

N氏は仕事以外にも終戦のときの外地邦人引き上げに苦労した話など聞かせてくれたが，ある時、ポツリとこんなことを言われた。「村田さん、あなたは会社の中では英語の出来る人です。しかし本当に外国語が出来るということは、その言葉でその国の歴史、文化、芸術を語り合えることです。」私はただ肯くばかりであった。この一言は私がかねがね思っていることに火をつけ、その後もくすぶり続けた。私が思っていたこととは、「会社でそこそこ英語が出来るといっても、世間で一人前に通用するものではないだろう」ということであった。そこでN氏の言うレベルに達するのは無理としても、せめて世間で通用する英語、つまり商品となる英語の読み書きができるようになりたいと思った。

それにはやはり翻訳学校で勉強すべきだと、会社では第一線から引退するのが近づいた頃、翻訳学校を調べた。丁度毎週土曜日に科学技術英語のクラスがあると勧められて入学した。大手家電メーカーの海外部長であったH先生の講義は予想通り斬新で、翻訳はいわゆる英文和訳や英作文の延長線にあるものではないこと教えられ、また受講生の中には、これまた予想通りスゴイ人が居た。

この学校に通い始めて２年目ぐらいにH先生から、人に教えると基礎がしっかりしますと言って、府立の貿易専門学校で工業英語検定４級を目標とする工業英語の講師の仕事を紹介され、併せて工業英語協会の通信教育を受けるよう勧められ「失礼ですが基礎コースからはじめてください」といわれた。この基礎コースは後々非常に役に立ち、基礎の大切さを実感することになる。その後、前述のようにいろいろの学校の講師を紹介され、翻訳会社からの翻訳依頼を受けるようになった。

ある年、工業英語協会の研修会で前川さんとバッタリ出会うことになる。このあたりの経緯は「水上龍郎先生を悼む（2002年11月）」の座談会に出てくる通りであり、その後1996年12月からOSTECに入会させていただき、水上先生の講義を拝聴することになった。OSTECのメンバーの多くの人が仰るように、先生の講義は「眼から鱗が落ちる」思いであった。そして翻訳学校の私の受講生で優秀な人を数名入会させてもらった。

それから６年間、毎月１回の水上先生の講義とグループ研と称する英和の自主勉強会に通った。「等価翻訳」「過不足なき翻訳」など、先生独特の表現の授業は毎回時間が瞬く間に過ぎ去り、その後のシンポジウムは楽しいものであった。かくして、商品として通じる英語を書きたい、翻訳をしたいという私の希望は徐々に叶えられつつあるように思えたが、英語の奥は深く、一つ山を越えるとまた目の前に山が現れる、そのようなことの連続であるように思えた。

2002年1月、惜しくも水上先生はお亡くなりになった。誠に残念なことであったが、OSTECの授業はその後、新進気鋭の平野先生に引き継がれて、私もまだ受講生の一人となった。何故まだ受講を続けているのか。現在教える仕事は僅かであり、翻訳を受注することも無い。OSTECを退会しても実利的には何の問題も起こらないであろう。しかし、今英語の勉強を止める気は全然無い。今止めたらたちまち元へ戻ってしまうのではないかという恐怖心からか、月2回OSTECのメンバーの皆さんと話す機会がなくなるのが寂しいからか、多分恐らくそのいずれも、止めない理由の一部になっているであろう。

何故英語に魅せられたか、その契機になるような明確な出来事はなかった。明確に述べることも難しい。しかし、細々でもまだ英語の勉強は続けたいというのは魅せられているからだと、逆説的に言えるのではないか。師に恵まれ、機会に恵まれ、友人に恵まれ、私の第2の人生は happy である。この幸せに感謝しつつ、まだまだ元気でいなければと思う。

私の駄文はやはり自分史になってしまった。お許しを乞う。

恩の字　　すくらっぷ

さて私の愛惜する屋根裏部屋は、二年も経たぬうちに空襲で丸焼け
それからしばらく戦中戦後の動乱期には、住み寝る所さえあれば
***恩の字*、転々の間にもちろん書斎どころではなかった。**
（谷沢永一「論より証拠」潮出版）

これは「御の字」とあるべきところ。「三階席だが、切符が買えただけでも御の字だ」というふうに使い、＜有難いこと＞という意味になるので「恩」の字が出てきたものであろう。
国広哲弥「日本語誤用・慣用小事典」＜続＞
講談社現代新書　１９９５年